KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA

第33回
春日井市交響楽団
定期演奏会

ハチャトゥリアン　組曲『仮面舞踏会』
ラフマニノフ　交響曲第２番ホ短調作品27

2025年7月13日（日）
会場：春日井市民会館

春日井市交響楽団HP
（https://kasugaiphil.org/）

アカウント
@kasugaiphil

主催：春日井市交響楽団
後援：春日井市、春日井市教育委員会、（公財）かすがい市民文化財団、中日新聞社、中部大学

ごあいさつ

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
石　黒　直　樹

本日は、第33回春日井市交響楽団定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

当交響楽団が、1990年に結成されて以来、長きにわたり市民の皆様に親しまれ、本市の音楽文化の発展に寄与してまいりましたことは、団員の皆様はじめ関係者のたゆまぬご努力と、市民の皆様からのあたたかいご支援の賜物であり、深く感謝を申し上げます。

今回も、指揮者に井村誠貴氏を、コンサートマスターに平光真弥氏をお迎えしました。交響楽団が奏でる素晴らしい旋律が、市民会館のホールに響き渡り、会場の皆様を魅了し、大きな感動を与えてくれるものと期待しております。

誰もが幸せを感じ、心豊かに生活できるまちづくりのためには、文化芸術が大きな役割を果たすものと考えております。本市では、「世代を越えて響き合う　文化創造のまち春日井」を基本理念とし、地域全体のウェルビーイングの向上にむけて様々な取り組みを推進してまいりますので、より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

それでは、本日のこのひとときを存分にお楽しみください。

春日井市交響楽団
会長

中部大学学長
前　島　正　義

第33回春日井市交響楽団定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

「市民が演奏し、市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として誕生した当楽団は、アマチュアオーケストラとして、皆さまからの温かいご支援、ご協力のもと地域に貢献できるよう演奏活動を続けております。33回目となる定期演奏会を開催できる喜びを分かち合い、皆さまに心から感謝申し上げます。

指揮には井村誠貴氏、客演コンサートマスターとして平光真弥氏をお迎えいたしました。

今回、皆さまにお届けするのは、ミハイル・レールモントフの戯曲『仮面舞踏会』のための劇音楽として作曲され、後に組曲が編まれたハチャトゥリアンの「組曲『仮面舞踏会』」、そしてラフマニノフ作曲の「交響曲第2番ホ短調作品27」です。力強くドラマティックな展開と甘美な叙情性が魅力の作品です。

楽団員一同、皆さまに極上の音楽をお届けするため努力を重ねて参りました。その成果を披露できることがこの上なく嬉しく、そして、私たちも今日の演奏会を心待ちにしております。感動の杜で、夏の午後のひとときをお過ごしいただければ幸いです。

ごあいさつ

団 長 **後藤 哲也**

本日はお忙しい中、第33回定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。今回の演奏会ではハチャトゥリアン作曲の仮面舞踏会とラフマニノフ作曲の交響曲第2番を取り上げました。

仮面舞踏会は5曲からなる組曲ですが、第1曲目のワルツはフィギュアスケートの浅田真央さんが銀メダルを獲得した2010年のバンクーバーオリンピックやそのひとつ前のシーズンで使用されていた曲で、これを機会に様々な場所で耳にする事が多くなったように思います。

また、浅田真央さんは、その次のソチオリンピックでは残念ながらメダルに届きませんでしたが、フリーの演技に感動を覚えた方も多くみえると思います。そのフリーではラフマニノフが作曲したピアノ協奏曲が使用されていましたが、本日2曲目に演奏する交響曲第2番もピアノ協奏曲同様、甘美で抒情的なメロディが次々に現れてきます。

今後とも、より幅広い音楽を良い演奏でお届けできるよう努めてまいりますので、引き続きのご支援をよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、当楽団の活動に当たり日頃からお力添えをいただいています春日井市・中部大学をはじめとした関係者の皆様に感謝申し上げます。

プロフィール

指揮 井村 誠貴 Masaki Imura

指揮者。1994年大阪音楽大学コントラバス科卒業。在学中よりオペラ指揮者として各地で研鑽を積む。オペラレパートリーは50演目を超え、中でも喜歌劇楽友協会におけるJ,シュトラウスⅡ「ウィーン気質」の邦人初演は注目を集めた。2001年イタリアに留学。現地ではAs. Li. Coの北イタリア・オペラ公演ツアーに同行し、副指揮者として高い評価を得た。2013年には年間オペラ公演回数が日本人第1位になる。管弦楽では、京都フィルハーモニー室内合奏団、大阪交響楽団、オペラハウス管弦楽団、京都市交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団等を客演。さらにOsaka Shion Wind Orchestra(旧大阪市音楽団)、シエナ・ウィンド・オーケストラ等の吹奏楽団との関係も深くその分野でも注目を集めている。ミュージカルでは「レ・ミゼラブル」「マイ・フェアレディ」「ラ・カージュ・オ・フォール」等のロングラン公演を指揮。また、岩崎宏美や、南こうせつ、夏川りみとの共演や、キダ・タローとのコンサートも話題となっている。2014年には、自身の企画により「ベートーヴェン振るマラソン！」と題して、1日でベートーヴェンの全交響曲を1人で指揮。そのギネス級の活動は大きな話題となった。2011年東日本大震災を受け、毎年チャリティコンサートを開催。9回の演奏会で5,400万円を超える義援金を届けた。指揮を湯浅勇治氏をはじめ、松尾葉子、広上淳一、辻井清幸の各氏に師事。現在、オーケストラＭＦＩ指揮者。春日井市民第九演奏会音楽監督、関西音楽人のちから『集』代表。

客演コンサートマスター 平光 真弥 Shinya Hiramitsu

愛知県立芸術大学音楽学部卒業。2005年、同大学大学院音楽研究科修了。中村桃子賞受賞。ヴァイオリンを青山泰宏、大久保ナオミ、福本泰之、Ewald Danel、岡山芳子の各氏に師事。指揮を紙谷一衛氏に師事。第11回日本クラシック音楽コンクール第3位。第1回宗次ホール弦楽四重奏コンクール第1位。併せて、聴衆賞、オーナー賞も獲得。2007年、2010年及び2012年小淵沢室内楽セミナーにて最優秀カルテットとして「緑の風 音楽賞」受賞。2012年には講師特別賞も同時受賞。これまで、プラハ放送交響楽団等ソリストとして多数のオーケストラと共演。2000年～ウィーン岐阜管弦楽団、2004年～2021年愛知室内オーケストラのコンサートマスターを務めるほか、神戸室内合奏団などの客演コンサートマスターを務める。クラシック音楽を親しみやすくより身近に感じてもらうために、サロンコンサートや学校アウトリーチ等も精力的に行い地域に根ざした音楽活動を展開。愛知県立芸術大学非常勤講師。2022年4月～中部フィルハーモニー交響楽団首席客演コンサートマスター。平成29年度愛知県芸術文化選奨新人賞受賞。

春日井市交響楽団 Kasugai City Philharmonic Orchestra

春日井市交響楽団は1990年に創設され、市民の音楽愛好家を中心に「市民が演奏し、市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」としての活動を続けてきました。愛称「カポ」（KAPO）は英字名称「KASUGAICITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」（capo 頭・先頭に立つ者）の思いもあります。日曜日には市内外から集まった約50名の団員が、西尾町にある「ハーモニー春日井」のホールで練習し、春日井市の音楽文化の原動力となるべく日々研鑽を積んでいます。

プログラム *Program*

ハチャトゥリアン：組曲『仮面舞踏会』
Aram Khachaturian (1903-1978) Masquerade Suite

Ⅰ.ワルツ	Waltz
Ⅱ.ノクターン	Nocturne
Ⅲ.マズルカ	Mazurka
Ⅳ.ロマンス	Romance
Ⅴ.ギャロップ	Galop

《休　憩》 ***Intermission***

ラフマニノフ：交響曲第2番ホ短調 作品27
Sergei Rachmaninov (1873-1943) Symphony No. 2 in E minor, Op.27

第1楽章	Largo-Allegro moderato
第2楽章	Allegro molto
第3楽章	Adagio
第4楽章	Allegro vivace

指　　揮　井　村　誠　貴

演　　奏　春日井市交響楽団

終演後、アンケートにぜひご協力ください。

※QRコードを読み取るとWebでご回答いただけます。

プログラムノート

≪組曲『仮面舞踏会』≫

情熱と哀愁、そしてきらびやかさが交錯する《仮面舞踏会》は、アルメニア出身の作曲家アラム・ハチャトゥリアン（1903–1978）が手がけた、きわめて印象的な舞台音楽です。この作品はもともと、ロシアの劇作家ミハイル・レールモントフによる同名の戯曲のために1941年に作曲されました。その後、5曲からなる組曲として演奏会用に再構成され、管弦楽作品として独立した人気を獲得しました。

ハチャトゥリアンは20世紀ソビエト音楽界を代表する作曲家の一人であり、《剣の舞》やバレエ音楽《ガイーヌ》《スパルタクス》など、民族的な色彩と情熱的なリズム感を持った作品で知られています。アルメニアの伝統音楽や舞踊のエッセンスを、西洋のクラシック音楽の形式に巧みに織り込んだその作風は、聴衆に強い印象を残すものです。《仮面舞踏会》もまた、彼の感性が鮮やかに表れた作品の一つです。

この作品の原作である『仮面舞踏会』は、19世紀ロシア貴族社会の虚飾と悲劇を描いた戯曲です。主人公アルベルトは、仮面舞踏会での不倫疑惑をきっかけに妻への疑いを深め、最終的に悲劇的な結末を迎えます。物語はロシア的な運命観と心理劇の要素を含みつつ、人間の内面に潜む嫉妬、愛、名誉といった複雑な感情が交差する重厚な内容となっています。ハチャトゥリアンはこのドラマティックな世界観を、五つの楽章それぞれに濃密に映し出しています。

第1曲《Waltz》

もっとも有名な楽章であり、作品の顔とも言える曲です。華やかな舞踏会の場面を描写したこのワルツは、優雅でありながらもどこか哀愁を帯びた旋律が特徴です。冒頭の弦楽による主題は輝かしい舞踏の中に潜む不安や悲劇の影を予感させ、単なる社交の音楽にとどまらない深みをもたらします。まるでゴージャスな仮面の下に隠された登場人物の本心を映し出すかのような、複雑な感情が渦巻いています。

第2曲《Nocturne》

静かに夜の情景を描き出すようなこの曲では、オーボエやクラリネットによる物憂げな旋律が印象的です。抑制された情熱と、言葉にならない思いがゆっくりと流れ出し、繊細な心理描写が光ります。まるで月光のもとで囁かれる秘密のような、濃密で詩的な雰囲気に包まれます。

第3曲《Mazurka》

ポーランドの民族舞曲であるマズルカの形式を借りたこの楽章は、軽快なリズムに乗って明るさと哀愁が交錯する音楽です。舞曲でありながらどこか内省的で、貴族的な優雅さをたたえながらも、仮面の奥に隠された心の動きが感じ取れるような複雑さが感じられます。

第4曲《Romance》

深い感情表現に満ちたこの楽章では、弦楽器を中心に心地よくて切ない旋律が歌われます。愛や後悔といった、登場人物たちの心情が丁寧に織り込まれたような音楽で、情景描写というよりも心理描写に重きを置いた、内面に訴えかける響きが特徴です。

第5曲《Galop》

組曲の締めくくりにふさわしく、激しい勢いと躍動感に満ちた曲です。仮面舞踏会の最後に訪れる混乱や感情の爆発を象徴するかのように、急速なテンポと跳ねるようなリズムが印象的に響き渡ります。ハチャトゥリアンの持ち味である民族音楽風のエネルギーがここに集約され、まさにドラマのクライマックスを飾ります。

組曲《仮面舞踏会》は、単なる舞台音楽の枠を超え、個々の楽章が独自の物語性と色彩を放つ、完成度の高い管弦楽作品となっています。ハチャトゥリアンの鋭敏な感受性と音響設計が生み出したこの組曲は、聴くたびに新たな表情を見せてくれる名作です。

（Cb 大矢光知留）

プログラムノート

≪交響曲第2番ホ短調 作品27≫

セルゲイ・ラフマニノフは、ロマン派音楽を代表するロシアの作曲家であり、重厚で壮大なドラマを感じさせる作調は、今もなお多くの人を魅了し続けています。ピアニストとしても有名ですが、彼自身の手が大きかったため、一般のピアニストには演奏が困難な運指の作曲が多いことでも知られています。

ラフマニノフは、1873年（明治6年）ロシアの貴族の家庭に生まれました。父親が自らピアノ演奏を子供たちに聴かせていたそうで、幼い彼がピアノを始めるのも自然な流れでした。しかし、9歳の時に一家は破産、故郷を離れることとなります。ラフマニノフは奨学金を得てペテルブルグ音楽院に入学しましたが、意外なことに全ての学科試験で落第するような不真面目な学生でした。その一方で、音楽の才能を確信していた母親は、悩んだ末にモスクワ音楽院（世界三大音楽院の一つ）に転入させます。この判断が、後の彼の運命を変える同じくロマン派音楽を代表するチャイコフスキーとの出会いへと導きました。彼に認められたことで、その才能にますます磨きをかけ、音楽院を首席で卒業することができました。その後「交響曲第１番」を書きあげたものの結果は散々で、評論家たちの酷評にさらされて回復に３年も要するノイローゼにかかるなど、作曲家人生初の挫折を迎えました。しかし、2014年のソチオリンピックで、フィギュアスケートの浅田真央選手がフリーで選曲し、感動的な演技を行ったことで記憶に残っている方も多い、「ピアノ協奏曲第２番」により復活を遂げます。その勢いに乗って書きあげたのが本日演奏する『交響曲第２番』です。ラフマニノフは晩年をアメリカで過ごしましたが、ロシア出国後は作曲活動が停滞していました。その理由を友人に問われると「もう何年もライ麦のささやきも白樺のざわめきも聞いていない。メロディーがないのにどうやって作曲するのか」と答えたそうです。

祖国を愛するがゆえに政府の文化政策に反対したことで、彼の作品は数年間演奏禁止とされたこともあります。最期はチャイコフスキーらが眠る祖国に埋葬されることを望みましたが、戦争中という状況から叶いませんでした。ラフマニノフもまた戦争に翻弄され、故郷を奪われた一人だったのです。

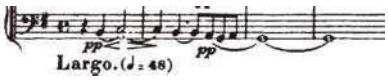
「交響曲第２番」は、大編成（弦楽器：Vn1, Vn2, Va, Vc, Cb, 管楽器：Fl3, Ob3, Cl2, BassCl, Fg2, Hr4, Tp3, Tb3, Tuba, 打楽器：Timpani, Cymbal, Bass Drum, Snare, Glockenspiel）で、演奏技巧的に難易度が高いため、KAPOにとって挑戦の1曲です。演奏時間が60分近くあり、カット版を演奏されることが多い作品ですが、本日はノーカットでお送りします。

ラフマニノフが愛した雄大な祖国の自然を感じさせるロマンチックなメロディーが各所に散りばめられ、感情の波が寄せては返す潮の満ち引きのように表現されています。楽章をまたいで共通のメロディーが使用され「統一感」があり、演奏時間の長さを感じさせない工夫が施された作品です。

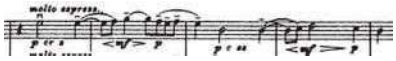
第１楽章　Largo-Allegro moderato

コントラバスとチェロから始まるこの序奏（譜例１）は、場面の切り替わりに使用される重要な動機となっています。主要部に入るとまずはヴァイオリンによって演奏されるテーマ（譜例２）が形を変え、まさに波のように様々な楽器に現れます。

（譜例1）



（譜例2）



第２楽章　Allegro molto

この楽章は、グレゴリオ聖歌の「怒りの日」がモチーフとなっており、まずはホルンによって提示されます。（譜例３）あの酷評された「交響曲第１番」でも多用されたメロディーであり、自身のトラウマを克服しようとしたのではないでしょうか。

（譜例3）

第３楽章　Adagio

冒頭はヴァイオリンによってメインとなるモチーフ（譜例４）が演奏され、続いてクラリネットによる甘く切ない旋律が22小節続きます。中間部ではヴァイオリンが同じメロディーを演奏しますが、フルートやオーボエが誘ってもダメ、クラリネットが誘ってようやく歌いだします。まるで恋の駆け引きのようです！

ここで登場するのが何と第１楽章のテーマで、その後、第３楽章のメロディーとともに演奏されます。

（譜例４）

第４楽章　Allegro vivace

フィナーレにふさわしく華々しく始まりますが、この冒頭に使用されているのは第２楽章のテーマです。モチーフは共通していますが印象は全く異なります。そして、中間部では、美しい第３楽章のテーマとともに第１楽章のテーマがふと回想される仕掛けがあり、最後はまさに「ＴＨＥ・ラフマニノフ」と言うべきオーケストラの力強い３連符で締めくくられます。

形を変えて現れるメロディーをぜひ探しながらお聴きください。　（Cl 小久保理香）